

植田総裁記者会見(10月16日)

——G20終了後の植田総裁、三村財務官 共同記者会見における総裁発言

2026年10月20日

日本銀行

—— 於・バンコク(タイ)

2026年10月16日(金)

午後6時37分から約25分間(現地時間)

【冒頭発言】

会合での議論の内容については財務官の方から様々なご説明があった通りでございます。私からは一言だけ、G20では中東情勢あるいはAI関連需要の動向等を受けた経済・物価等への影響あるいは動きを含め、世界経済や金融システムなどについて議論が交わされたということをご報告させていただきます。

【問】

植田総裁には、今回のG20、IMF総会では世界経済のショックに対する頑健性についていろいろな声が出た一方で、旺盛なAI需要によるインフレ圧力が話題になったと思います。今回の会合での議論は10月の展望レポートでの議論や今後の利上げパスについての議論にどう影響するのでしょうか。日銀は物価の上振れリスクの高まりを重視して9月に利上げしましたが、こうやって世界的に高まるインフレ圧力を考えると、また近いうちに更なる追加利上げが必要な環境というふうにお考えでしょうか。

【答】

世界経済のインフレ圧力のようなものについて何か示唆があったかどうか、それが私どもの今後の政策にインプリケーションがあるかどうかというご質問だったと思いますけれども、まずインフレ圧力そのものについては、私ども暫く前から、円安に加えて中東情勢とAI関連の動向というものを注視するということを申し上げてきた通りです。特に中東とAIは世界全体に影響する話で、従って、詳しく私どもも分析してきましたし、今回の様々な会合で世界の政策担当者と議論したわけですが、われわれとその他の政策担当者間で大きな食い違いはないという印象を持ったところです。あえて申し上げれば、AI関連の需要動向について、私どもがみていたよりも、やや心持ちしっかりしている、需要そのものですね、というふうにみてらっしゃる方が少し多いかなというふうに思ったところです。こうしたことの私どもの政策への含意ですけれども、基本姿勢を申し上げることにとどまりま

すけれども、基調的な物価上昇率が 2%に近づいている中で、一方で金融環境がいつも申し上げている通り緩和的な状態が続いているということです。基本的には引き続き政策金利を、経済・物価・金融情勢に応じてですけれども、引き上げて、緩和度合いを調整していくというふうになると考えています。そのうえで、タイミングやペースについては、今申し上げたような中東、AI 関連の需要の動向、あるいは為替相場の動き、これをみながら私どもの見通しの確度やその周りのリスクを点検しながら検討していくということです。9 月の決定会合後の会見で申し上げたことと重なりますけれども、その際に、基調物価が 2%にかなり接近しているという中では、基調物価の上昇率を 2%程度で安定させていくという観点がこれまでよりも重要になってくるというふうに考えております。そういうことを考えつつ、適切に政策を判断してまいりたいと思っております。

【問】

植田総裁に伺います。若干、今の質問と関連するんですけれども、一連の会議やバイ会談で様々な政策当局者の方と意見交換されたと思うんですけれども、私も 10 月 30 日に新しい展望レポートが出るってことを念頭に伺いたいんですけれども、先ほど、AI 需要のところがもともとみているよりは心持ちしっかりしてるってような所感をおっしゃってらっしゃいましたけれども、中心の見通しやリスク要因の記述を考えると、これまでのシナリオを変更するような必要性というか、新しい発見みたいなのところっていうのはあったのでしょうか。

あと、基調物価上昇率に関してなんですけれども、こちらも今まで展望レポートで、2026 年度後半から 27 年度にかけて 2%目標と整合的な水準になるっていうふうに見通しを示してこられましたけれども、10 月会合で 26 年度後半というところに入ってきます。この記載ぶりというのはその見通し期間に入ってきたところで変える可能性はあるとお考えでしょうか。

【答】

私どもの中心的な見通しを変えるようなニュースがあったかどうかという点ですけれども、まず 9 月の決定会合後の日本経済周りのデータをみる限りは、概ね私どもの見通し通りに動いているというふうに考えています。今回の会合で様々な意見交換をしましたけれども、そういうことと矛盾するような重要な情報がもたらされたというふうには考えておりません。

それから基調物価の判断について、10 月の決定会合でどういうふうに記述するかということですが、今のところ 2%にかなり近づいているっていう表現ぶりでありまして、これをどういうふうにするかということについては、これは申し訳ありませんが、10 月の会合でそこまで得られた情報をもとに、政策委員の間でしっかり議論して結論を出したいと思っております。

【問】

植田総裁に私も二問ほど質問させてください。まず一問目なんですけど、今回の一連の会合ではベッセント米財務長官が欠席されましたので、対面でお話する機会はなかったと思うんですけれども、アシュビルの G 20 以降の機会では何かコミュニケーションをとられるような場面はあったのかというのを伺いたいのが一点です。

もう一つは先ほどの質問にも関連するところなんですけど、基調的な物価上昇率が2%に達している、こういった判断を次回、今月の会合でも一部同じ政策委員の方とお話しされるかなと思うんですけども、もし物価上昇率が2%に達していると判断された場合、それは金融政策を判断するうえでどのようなインプリケーションがありますでしょうか。例えば、比較的速いペースで利上げを進める必要があるですとか、そういった意味を持つことなんでしょうか。

【答】

ベッセント長官とはアシュビル以降、コミュニケーションは特にとっておりません。

それから二番目は、基調物価に関する表現ぶりをどうするかということは先ほどのご質問もあったところですけども、それは10月の決定会合の議論を待たないと、何とも私から今の時点では申し上げられません。ただし、既にかなり基調物価は2%に近づいているということは私も含めて申し上げてきた通りで、それは前回の会合で、ある種、政策の局面が変化したということであるというふうに申し上げてきています。その意味は先ほどもちらっと申し上げましたけれども、これまでは基調物価を少しずつ2%に近づけていくという意味で上がる、下から来ていますので、という方向の動きを容認してきたわけですけども、今後は2%に概ね近いということで、これ以上上がるということは容認できない、2%近辺で定着していくということを政策の大きな目標にするという姿勢に、最近局面が変化したということでございます。

【問】

植田総裁にお伺いさせてください。先ほどもこれまでのG20、G7とかの会合を踏まえてお話もありましたけども、植田総裁として一連の日程を振り返って、今回の成果として挙げられる部分というのはどういったところになるのか、例えばどういった意見交換をしたっていうところが大きな示唆を得たとか、その辺り、成果としてとらえてらっしゃる部分があればお願いします。

【答】

具体的なことはなかなか申し上げられないので、抽象的な一般論になってしまいますけれども、先ほど来申し上げてますような中東情勢あるいはAI周りの動き、こういうことが世界経済、日本経済、あるいはそれぞれのインフレ動向にどういうルートを通じてどういうふうに影響するのかということについて、私どもも海外の政策担当者も様々な意見、情報を持ってるわけですが、それをお互いに議論して情報を交換し合う、それによってわれわれの判断をよりしっかりしたものにする、そして次の政策に役立てていく、こういう場として私どもは活用させて頂いてますし、それは海外の政策担当者も同じであるというふうに思っています。

【問】

植田総裁に二問質問させてください。今回ベッセント氏は欠席されましたが、FRBのウォーシュ議長は出席しましたが、何かコミュニケーションなどはあったんでしょうかというのが一点。

もう一点が中立金利についてですけど、政策金利1.25%到達してますが、中立金利にはまだ対応

の距離があると考えていらっしゃるでしょうか。その辺りの少し考えをお伺いしたいです。

【答】

ウォーシュ議長とはもちろん立ち話や会合の中の意見交換を含めて、様々な意見交換を致しました。具体的な内容については差し控えさせていただきます。

それから中立金利に関してですけれども、これはこれまでも申し上げています通り、はっきりとこの辺にある、ここにあるっていうことを申し上げられるような材料があるわけではない一方で、これまでの利上げの累積的な効果、金融環境および経済・物価へどういう影響が累積的な効果として出てきているかということを見ながら、一步一步判断していきたいというふうに考えています。

以 上